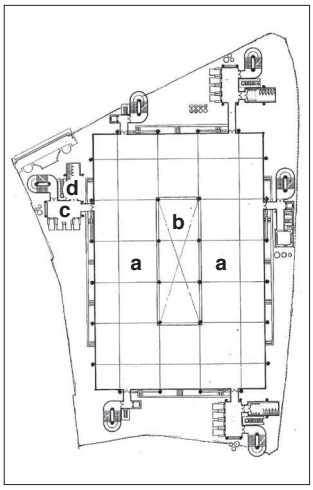
20世紀の建築空間遺産 19

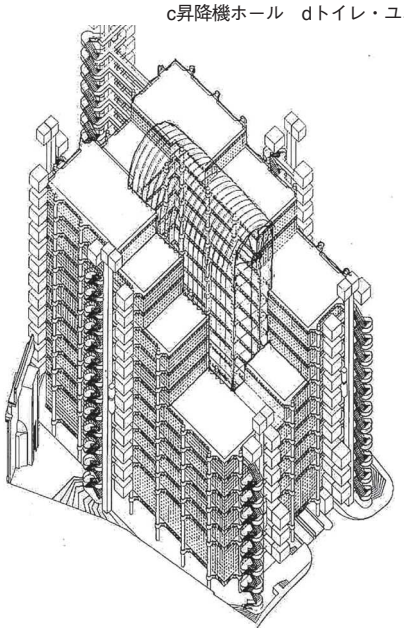
地域建築空間研究所 小林 良雄
写真：鎌田一夫

ロイズ・ビル　1986年　リチャード・ロジャーズ

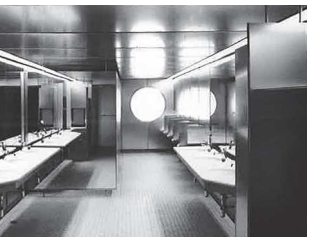
北東側外観



2階～7階平面図　a業務室　b吹抜け
c昇降機ホール　dトイレ・ユニット



全体構成図（西南側鳥瞰）



左上 1階保険取引ルーム　左下 トイレ・ユニット　右 吹抜け上部
3枚の写真は『a+u』1988年臨時増刊号による

中央吹き抜けのハイテク・ビル

バブル経済が日本で過熱した'80年代、建築では「ポスト・モダニズム」がもてはやされ、表層を過去の様式の部分的引用で装うなどが流行した。しかしその流れに空間構成上の革新はない。一方、この時期にモダニズム建築の底流にある技術重視を積極的に継承し、新素材の導入やプレファブ工法を徹底した建築が出現する。その担い手の一人のロジャーズはパリのポンピドゥー・センターをレンゾ・ピアノと協働で完成（'77年）させ、翌年に独立。同年にロンドンの金融の中心地シティに建てるロイズ保険組合の本拠ビルの指名コンペで最優秀賞を得る。完成は'86年。

ロイズは20世紀に2度建て替えをしており、要求は、拡張や内部の改変の柔軟性重視と環境への貢献、世界の保険業務の中心としての地位に見合う高い質の確保であった。

敷地はシティを東西に貫くリーデンホール通りに面する不整形の四辺形である。その中に約42m×64mの矩形の業務空間を収め、外側に階段と昇降機ロビー、トイレ・ユニットを一組として層を重ねたタワー6本を分散配置した。これは、設計者が自認するようにルイス・カーンが主張した主（サーブド）、従（サーバント）空間の適用である。

保険取引の場である「ルーム」は道路面から2.5m上ったレベルの中央部分に約10.5m×約31.5mの広がりで設け、この階は2層分の高さを与えた。その上部は屋上まで吹き抜けで貫くアトリウムで、ガラスのボールト屋根を載せている。基準階はロの字型プランだ。外壁側は光熱の入射を調整し、主たる自然採光はアトリウムからとなる。

全体構成は、北側のリーデンホール通り側から、由緒ある低層のマーケットがある南側へ、13階、10階、7階と下がる段状構成である。

タワーの最上部に空調機械のパッケージを載せ、各階への給排気ダクトはラッキングして外部露出、大規模改修工事時に外部作業で対応可能としている。内部では2重床にして空気を入れ、床から吹き出している。

構造円柱や露出ダクト、タワーの分節された構成要素は、街並みを構成する様式主義の石造建築の円柱や凹凸とスケール感が近似し、仕上げ材は両者とも素材で無彩色であり、違和感を緩和している。

この空間構成は、F.L.ライトによる、今は無きラーキン社ビル（1910年）を想起させる。労働の一体感醸成のため中央5層吹き抜けで天窓採光、初の空調の執務空間。外側に階段、縦ダクトを配す。完成直後に見たベルラーヘは深く感銘し、欧州の若い建築家に伝えた。時はモダニズム建築の胎動期。失われた画期的な空間構成が同じ世紀内に、ハイテクノロジーを用いて大規模に蘇ったとも言える。